新進芸術家海外研修制度
研修結果報告書

研修開始年度｜令和４（2022）年度

分　　野｜映画（映画上映　映画プログラミング）

研　　修　　先｜オランダ（ロッテルダム）

研　修　期　間｜１年

氏　　名｜清水　裕

１．研修目的（課題）

研修で得た知見を日本での上映活動に生かす。プログラミングと映画祭マネジメント双方をリサーチすることによりスキル向上を図り、映画祭の意義およびパンデミックを経たスタンダード更新に向け、理想的なありかたを模索する。

研修先における、作家・観客・映画業界の各ニーズに応える作品選定と運営についてリサーチする。特に若手や芸術志向作品の海外展開と観客育成について、「製作」「流通」と連携した上映の戦略を再考する。現地の作品評価を知ることにより日本映画の強みと課題も探る。また他映画祭等へ参加することで欧州でのネットワークを強化し、日本映画の海外展開や文化交流活性の一助となることを目指す。

２．研修日程

研修先　：ロッテルダム国際映画祭（International Film Festival Rotterdam）

所在地　：オランダ（ロッテルダム）

指導者　：チャーリー・バーミューレン（Charlie Vermeulen）

研修期間：令和 4(2022)年 9 月 20 日～令和 5(2023)年 8 月 25 日

▸うち国外研修

2023 年 2 月 15 日～2023 年 2 月 27 日（ドイツ／ベルリン国際映画祭）

2023 年 5 月 17 日～2023 年 5 月 28 日（フランス／カンヌ国際映画祭）

2023 年 6 月 3 日～2023 年 6 月 9 日（ドイツ／フランクフルト地域）

2023 年 7 月 4 日～2023 年 7 月 9 日（フランス／FID マルセイユ国際映画祭）

３．研修内容、成果

Ａ）研修課題の題目

【課題①】プログラムリサーチ

【研修内容・方法①】

・応募作品：日本製作の選考作品を全て鑑賞。加えて地域では東アジア、アジア、ヨーロッパ、アメリカを重点的に鑑賞。過去開催も遡り可能な限り鑑賞し、担当した実験映像のプログラムも含めて、選定されなかったものを含め多くの作品を見ることで傾向やいまどこでなにが起こっているかを掴むことが出来た。

・作品選定：応募作品の鑑賞を踏まえて、長編・短編それぞれ週 1 回の選考会議にオブザーバー参加しプログラマーによる議論を聞いた。加えて全ての応募作品の情報が網羅されるデータベースには議論に掛からない作品に対する各プログラマーによるコメントが掲載されるため、日本製作応募作品に関しては全て目を通した。広報発信を通した IFFR としての打ち出しの把握と、会期中・会期後は参加作家、ステークホルダー、産業の専門家へ直接プログラミングに対するヒアリングを行い、内部にいては知ることが難しい今期プログラミングに対する率直かつ客観的な評価を得るよう出来る限り努めた。

・キュレーション：IFFR では公募を経た選定のみでなく、エクスパンデッドシネマやパフォーマンス、

展示等様々なプログラムが存在し、それらを構成するための議論も選考会議で聞くことが出来た。当方は実験映像を収蔵・配給する会社による国際的コレクティブ DINAMO と IFFR とのコラボレーションのプログラムのコーディネーションを担当。DINAMO は主にヨーロッパから北米、アジアを含む約 40 社が集まる大規模な団体であり、今期は 16 社が参加して短編集を 2 プログラム上映した。IFFR 短編のプログラマーらが 2 つのテーマ（今回は「Blues」と「Displacement」）を提示、各配給会社がテーマに応じた 12 分以内の作品を複数提出、その中からプログラムを構成した。また会期中に行われるコレクティブの内部会議をコーディネートし、実験映像界の状況や課題を共有する議論にオブザーバー参加。IFFR は実験映像にとって最大のプラットフォームであったゆえ組織改編を経た今後の方向性と DINAMO としての協働のありかたについて重要な議論となった。上映は 2 回とも満席売り切れとなり上映後の質疑応答も活発であった。

・出品にまつわる業務：所属部署の Programme Operations はプログラマーと併走し作品出品のコーディネーションを担う。自身が担当した DINAMO 2 プログラムに選定された 19 作品の情報や素材等を取り寄せ、各 1 回上映を実施するための全てのコーディネーションを行う。それに伴う広報関連業務、プロフェッショナル向けヴィデオライブラリの手配、参加配給会社から来る 30 名弱の関係者の招聘を担当、会期中の内部会議をコーディネートした。上映ではプリント、デジタル、ビデオと様々な上映用素材が入り組む複雑なオペレーションが必要になるため会場担当や映写技師さんと事前の綿密な確認を行い実施。

・イベント：舞台挨拶、上映後質疑応答、トークイベント、マスタークラス、プロデューサー向けラボの講義等、会期中可能な限り多くの機会へ足を運んだ。特にプログラマーがモデレーションを務める機会での観客へ向けた作品プレゼンスの提示のしかた、日本映画の質疑応答を通して観客のリアクションを掴もうとした。会期中はほぼ毎朝モデレーターミーティングに参加し、前日のフィードバックと当日のプランニングをヒアリングした。開閉幕式や授賞式への参加に加え会期後に審査員と直接ヒアリングすることで評価ポイントを探った。

【課題②】運営リサーチ

【研修内容・方法②】

・組織体制：構造、仕組み、機能、各担当の役割の把握、ジェンダーバランス、世代のバランス等を調査。雇用スタッフ、有期スタッフ、インターンの働きかたについても調査。チームには内部と第三者機関によるカウンセラーが常駐しスタッフは誰でも無料で利用可能。カウンセラーは利用者への診察の必要有無判断や組織への提言を行う機能も持ち、匿名性が担保されるため安全かつ健全に組織運営をする環境が整備される。会期終了まで平日はなるべく事務所へ出勤し、同僚とのこまめなコミュニケーションやオン・オフのとりかたを含めた働きかた、労働環境に対する認識を理解するため対話に務めた。

・イベント（内）：内部向けのイベントとして、月 2 回のオフィス・ランチ、月 2 回程度のパーティー、会期 1 か月前に選定作品をプログラマーが紹介するプレヴュー・ナイト、スタッフ試写等に参加。スタッフ間の円滑なコミュニケーションやモチベーション維持のためのファシリテーションとして機能する。会期中に約 800 名が参加するボランティア向け試写やアフターパーティーも行われ、それらに積

極的に参加しスタッフへモチベーションや感想のヒアリングを行った。

・イベント（外）：クローズドの近隣教育機関における学生向け地域交流と将来の観客創造のためのイベントに参加。また IFFR2022 はオンライン開催であったため、コンペのみ 2023 年 10 月の 3 日間、対面開催 Return of the Tiger: IFFR2022 が開催された。運営・ホスピタリティを中心に調査を行うと同時に、作品調査を実施しチーム改編前後の違いについてプログラムの比較と作家へのヒアリングを行った。『やまぶき』山﨑樹一郎監督のアテンド対応を行った。

・会場：普段からアートハウスへ足を運ぶため通常時の各劇場の特色（形式、デザイン、サイズ、立地、サービス、客層）を認識したうえで、IFFR 会期でどのような変化があるかを踏まえて理解した。また臨時会場となる施設やその中にある複数スクリーンで極力多くの場所で実際に鑑賞することで、より上映環境を体験した。市内展示会場もほぼ全ての場所に足を運びサイトスペシフィックな体験として観客にいかに受け取られているかを捉えようとした。

・広報：市内外の各地で行われる関連のプロモーションに極力足を運び打ち出し方を確認。

・ホスピタリティ：一部日本ゲストのアテンド対応を行うことを通して業務を理解した。場所案内、質疑応答対応、映写チェック、交流を促す等。英語を話さないゲストが多いため他国に比べて圧倒的に人手がかかるがそれに対する特別予算はなく、ボランティアの稼働と負担が大きすぎるということがわかった。また帰国時のウイルス陰性証明等の対応も日本人ゲストに必要性がある場合が多かった。

・ボランティア：開幕数日前の 800 名近いボランティアに向けた研修運営に参加。チームごとの振り分けがあるため全てのチームに顔を出し、業務説明からコミュニケーションの方法を観察した。チケッティング、展示のオペレーション、劇場内のオペレーション等、会期中運営の大きな部分を担うボランティアの参加モチベーションについて直接ヒアリングを行い理解に努めた。過去のボランティア実績を踏まえて会期中アルバイトスタッフとしてスカウトされるスタッフもいて、地域との強いつながりやリクルーティングも兼ねることが伺えた。

・閉幕業務：会期終了 2 日後に長編のプログラマーたちによるフィードバック・ミーティング、翌日は短編のプログラマーたちによるフィードバック・ミーティングを実施。特にチーム改編を経て初めての開催であったため、運営上の課題やプログラミングのクオリティをあげるための具体的な提言がなされ、次回開催に向け合理的に変更がなされていくことがその場で確認された。所属部署では主に精算、報告業務、返却等のバラシ作業を実施しこれに関しては日本と大きな違いを感じなかったがスピード感は IFFR の方が非常に速かった。

左：IFFR チームフォト　　右：湯浅政明氏マスタークラス

左：Dinamo プログラム質疑応答　　右：メインコンペ授賞式

【課題③】他映画祭とネットワークのリサーチ

【研修内容・方法③】

・他国映画祭：ベルリン国際映画祭、カンヌ国際映画祭、ニッポンコ・ネクション、FID マルセイユ国際映画祭に参加。コンペを中心に連日 5－6 プログラムを鑑賞し、作品調査に加えて選考の観点を知ろうと努めた。ベルリンでは批評家週間や市内ギャラリーの鑑賞、カンヌでも平行部門の批評家週間・監督週間・L’acid も極力鑑賞した。一般上映のみでなくプレス上映やイベント等多様な種類の機会に参加。プロフェッショナルとして参加することで映画業界関係者と積極的な交流を通し、各機会の位置づけや意味合いの違いを掴もうと努めた。

・地域映画祭：日本映画祭の Camera Japan、ドキュメンタリー分野で世界最大規模であるアムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭（IDFA)、人権映画祭の Movies That Matter、欧州最大かつ最長の歴史をもつアジア映画祭の CinemAsia に観客として参加、作品を可能な限り鑑賞。各映画祭のディレクターやプログラマー、スタッフと交流し、選定の観点や観客へのリーチの方法等についてヒアリングを行った。

・地域映画館等：ロッテルダムまたはアムステルダム市内のアートハウスにほぼ毎日通い、新作を中心に鑑賞。特に主要映画祭のコンペ部門へ入選した作品や公式部門の受賞作は半年～1 年後に現地配給されることが多いため、アートフィルムを多く見る。加えて映画館ごとの特色として企画される特集上映やイベントに足を運び、作家のフィルモグラフィを極力網羅的に見ることに務める。プログラム調査に加えて客層も観察するよう努める。

・Cineville：オランダ国内のアートハウスのサブスクリプション・サービスを運用する会社とサービス名。月額 22.5€で見放題、一部映画祭や上映イベントでも使用可能で国内 75000 名の会員数を誇るオランダ最大の映画ネットワークである。アートハウス存続の危機があった 2000 年代前半に発足し現在は 65 館が加盟、スクリーン数を増設する館があるなどインディペンデントや中小規模の配給会社にとっても重要な役割を担う。創設者にヒアリングを行い、展開の背景について具体的な事例や方法論を聞くことが出来た。

・Eye Film Museum：オランダの国立の映画アーカイブ施設であり、5 スクリーンのシネマと 1 つの巨大

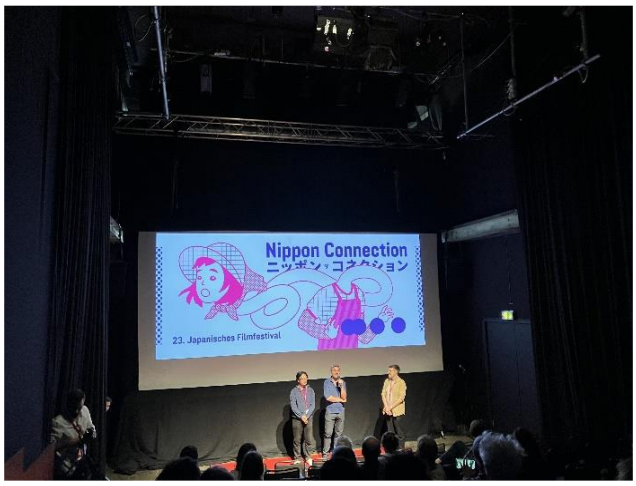
な映像展示室、映画資料展示室を持つ施設。加えて徒歩 10 分程の距離に同組織による Collection Center があり、フィルムの修復保存を行う施設を見学しアーキビストから直接修復作業についての説明を聞いた。ライブラリや資料貸し出しも行うため調査に頻繁に通い、現地研究者と共に 1960 年代以降のオランダにおける日本映画の上映歴をリスト化し更新する作業とディスカッションを行っている。

・美術館・博物館：Museumkaart というオランダ全土 400 館以上の美術館・博物館等で使用可能な年間パスを使って週に 1-2 回は観覧に通う。レンブラント・ファン・レインやヤン・ファン・エイクに知られるように古典のみならず、ヴィンセント・ファン・ゴッホはもちろん、現代美術も活発な地域として多様な作品に触れることが可能。加えて世界中の作家の企画展も常に開催される。美術館のみならずギャラリーが有料の場合も使用可能なことが多い。またユダヤ系が多く暮らして来た歴史からもユダヤ歴史資料館やアンネ・フランクの家、建築博物館、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト博物館、植物園等、美術に限らず様々な博物館で使用が可能なため頻繁に利用し、現地の歴史や文化を知る大きなきっかけとなった。

・アーティスト・イン・レジデンス：世界有数のレジデンス施設として知られる国立芸術アカデミーのライクス・アカデミーや、南部マーストリヒトに所在するヤン・ファン・エイク・アカデミーのオープン・スタジオを訪問。公開イベントにも積極的に参加。ライクス・アカデミーのレジデンスアーティスト達とは日常的に交流を行い、スタジオやレジデンスにも頻繁に足を運んでいる。

左：Berlinale2023 飯村隆彦氏インスタレーション　　右：CinemAsia2023 今井ミカ氏質疑応答

左：Movies That Matter 2023 質疑応答　　右：ライクス・アカデミー オープン・スタジオ 2023



左：ヤン・ファン・エイク・アカデミー オープン・スタジオ 2023　右：ニッポン・コネクション 2023

左：Eye Film Collection Center 見学時
右：アムステルダム市内レジデンス施設 De appel ギャラリー

Ｂ）研修の成果

<u>大幅に達成できた</u>

・主要大規模映画祭であるロッテルダム国際映画祭（IFFR）における作品選定の議論とプロセスを知ることで、様々な観点（対各作品、各地域、映画祭という機会、フィジカル開催について etc.）を学ぶことが出来た。特にインディペンデント映画、（東）アジア映画、実験映像の捉えられかたを知ることが有意義であった。

・2022 年春の組織改編を踏まえた IFFR としてのアーティスティック・ディレクション志向とその意図を知ることが出来た。またそれに対するステークホルダーや観客の反応を知ることが出来た。

・IFFR2023 における日本映画の選定、開催時のイベントの様子、日本映画関係者の様子、観客からのリアクション、ステークホルダーからのリアクション等を客観的に認識できたことが有意義であった。加えて近隣諸国を含む欧州の映画祭や劇場公開での日本映画の展開を踏まえて課題を自分なりに把握した。

・現地生活が土地への理解につながり、観客を想定した上映やイベント企画について考えることが可能になった。映画を含む文化を幅広くとらえ、特にオランダで盛んな美術や建築に多く触れることが出来たことは映画上映に取り組むにあたっても重要なインプットとなった。

・他映画祭の作品選定と運営を知ることで IFFR と対照して理解を深めることが可能になった。IFFR と重複する人や作品の動きを含め、それらの位置づけや意味することの違いを知ることが出来た。

・IFFR に対する一方的なリサーチのみならず実業務を担当することにより、同僚やステークホルダーとの信頼関係をより深く築くことが出来た。また労働環境について理解することも可能になった。それを経て次回 IFFR 会期で継続して仕事をすることになった。またオランダ国内の別の映画祭でも仕事をする予定であり、長期滞在したからこそ可能になる機会を得ることが出来た。CinemAsia のスタッフとは日常的に交流を行い、2023 年審査員賞を受賞した三宅唱『ケイコ 目を澄ませて』のイベント上映を 8 月にユトレヒトにて行った際は前説を依頼され担当した。

CinemAsia2023 審査員賞受賞『ケイコ 目を澄ませて』@ユトレヒト Hoogst
前説実施時の案内画像（2023 年 8 月 27 日）

C）研修成果の活用計画

・上記の通り IFFR で継続して従事。

・オランダの短編映画祭 Go Short の学生部門で選考委員として従事。

・ベルリン批評家週間でアドバイザーとして従事。

・欧州における映画関係者との信頼関係を築いたこと、日本映画の海外展開についての課題を認識したことを踏まえて、具体的な上映に繋がる機会とするために尽力する予定。

Ｄ）研修国の情報

・低収入では衣食住がままならず研修の充実に大きく響いた。家賃相場は東京の 2-3 倍、住居不足が深刻で家探しは世界最難関といわれる。1 物件に数百人が応募する状況で多くの人が住居に不満を持ちながら暮らしているといえる。当方も大家による違法な要求で住居トラブルとなり一時緊急事態に陥ったように、大家と借り手の間には圧倒的な力関係が発生しハラスメントやトラブルが頻発している。加えてコロナや戦争によるインフレで物価高が続き、光熱費が高騰、11 月から 3 月まで氷点下を記録する土地で暖房の使用にも金銭面の理由で制限があり人生で初めての体調不良を長く患った。十分な収入があればこれらの問題は改善に向くことが出来るが節約生活を送ると簡単に窮地に陥るということを、身をもって体験した。

・社会文化として「透明性」「革新性」「合理主義」があると個人的に理解しており、その点システムや意味を理解しやすく外国人として生活しやすいと感じた。「空気を読む」「言ったことと思っていることが異なる」のような文化がない。また古いものが重要であることは大前提として“変わる”ことに抵抗が低い。人権意識や異文化に対するリテラシーも高く、同性カップルも多い。オランダでは義務教育を終える時点で英語が自在に扱えるレベルにあるためいかなる収入層でも英語を話す。それにより移民にとっても暮らしやすい土地と言え、長年暮らしておきながらオランダ語を話せない人も少なくない。

・日蘭友好協定により日本国籍を持つ者にとって最も移住しやすい国であるオランダであるゆえ、ロッテルダムの街で日本語を聞くことはほぼないが、アムステルダムには日本人が比較的いる。しかしオランダ（のみならずヨーロッパ）から日本に対して求められるイメージはエキゾチシズムやオリエンタリズムが感じられ、現実についてはアップデートされていないと感じることがほとんどであった。一方移民受け入れや多様性を許容する社会として政治的に困難な地域から移住してきた移民も多く、ウクライナ、イラン、中国、タイ、ブラジル等の国籍の友人も多数できた。このような人たちの意識と日本人移民の意識とで大きく異なることは欧州における自国文化の受容のされ方への批判精神であると感じており、日本のそれはオリエンタリズムをもはや内面化して欧州で受け入れられやすいものに変換したものを自ら差し出すような光景が多々見受けられた。また日本人コミュニティになったとたんに seniority が発生する側面もあるためそれを避ける人も少なくない。

・アムステルダムでは毎日のように美術や映画関連のイベントが行われ閉鎖的な雰囲気もあまりないため関心領域へのアクセスや人的ネットワーキングもしやすいといえる。英語字幕付き上映はアムステルダムでの機会が最も多く、外国人が集って英語字幕付き上映で見るシネクラブも存在する。一方ロッテルダムでは音楽コミュニティのほうが大きく特にジャズやアフリカンミュージックが盛ん（アムステルダムは比較すればテクノミュージックが盛ん）。また建築分野はヨーロッパの中では比較的新しい街といえるロッテルダムが盛んであったり、ロイヤルファミリーが暮らすデン・ハーグは世界有数のパフォーミングアーツカンパニーNederlands Dans Theater があったりと、国土の広さは九州と同等だが街によって大きく風景や特色が異なる。